

お茶の水女子大学キャンパスの変遷と計画に関する研究

A Study on the Development of the Campus Planning of Ochanomizu University

0330111 高田 愛 Ai TAKADA

指導教官 元岡 展久 Nobuhisa MOTOOKA

1 目的

大学は、研究成果や資料、及び諸施設といった、多くの資産を所有している。今後、それらはより有効に利用されることが求められている。こうした背景をふまえ、本研究はまず、お茶の水女子大学キャンパスについて、敷地、建物の成立過程を明らかにすると同時に、社会、文化との関わりから各時期のキャンパスを評価した。次に東京都 23 区内において、他大学の事例を基に、キャンパスにおける建物配置を比較、分類した。これらの結果から、お茶の水女子大学における建物の適切な保存と敷地の活用について、今後のあり方に示唆を与えることを目的としている。

2 お茶の水女子大学キャンパスの時期分類

2-1 方法

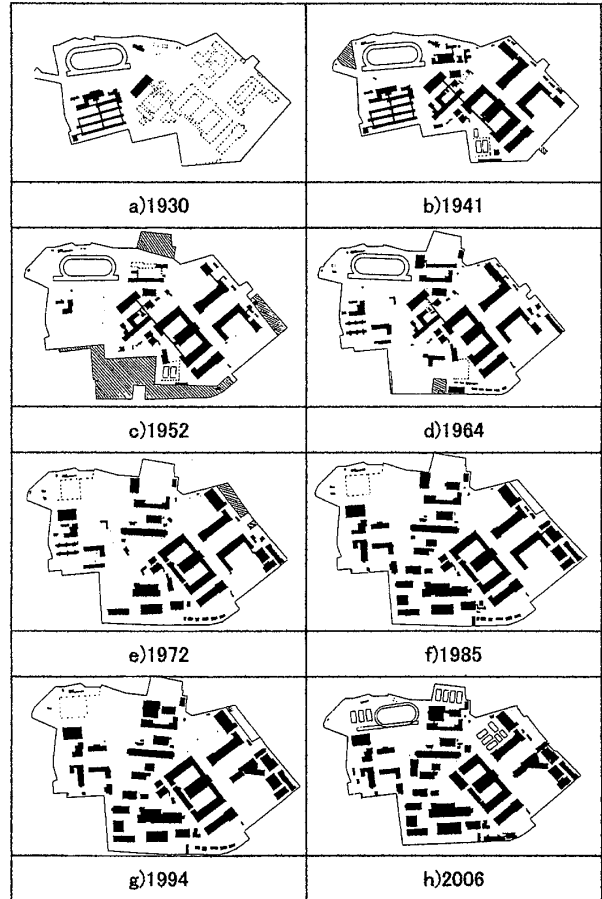
昭和 4 年(1929 年)、お茶の水女子大学(当時東京女子高等師範学校)が現在の大塚の土地に移ってきた年以降を対象とし、当大学の施設課に保管されている当時の建築図書、並びに図書館に保管されている大学案内から配置図を再現し、建物、敷地、軸の変容を比較した。

2-2 時期分類

本研究では、建物、敷地、建物配置の比較により、軸、領域という概念を見出し、これらの点に着目して 1929 年から現在までを表 1 のように五期に分けた。

	分類	年代	参照
1	骨格の形成期	1929~41	図 1-a), b)
2	敷地の拡張期	1942~46	図 1-c)
3	周辺施設の拡張期	1947~66	図 1-d)
4	軸の変換期	1967~82	図 1-e)
5	建物飽和期	1983~	図 1 f), g), h)

表 1 キャンパス成立過程の分類



■ 新たに敷地となった所

図 1 お茶の水女子大学配置 (1/18000)

2-2-1 骨格の形成期【1929~41】

施設の建設において基本となる、三つの軸が形成された。この三つの軸は現在まで継続している。

2-2-2 敷地の拡張期【1942~46】

昭和 17 年(1942 年)、厚生省との管理換により敷地が拡張した。また戦争により木造建物の多くが焼失した。

2-2-3 周辺施設の拡張期【1947~66】

学外に寮が設けられ、替わりに学生会館や音楽練習教室、課外活動団体談話室などの周辺施設が建てられた。また新しく敷地になった土地において新たな軸が設定され、軸は四つとなった。

2-2-4 軸の変換期【1967~82】

施設の建て替え、増加に伴い軸の領域が変

容してきた。また施設が増加したことにより、四つの軸の領域がぶつかり合い、それらの境界部は三角形のオープンスペースとなっている。

2-2-5 建物飽和期【1983～】

敷地が埋まり、建て替えや改修が主流となった。敷地、軸、領域などは変わっていないが、高層施設の建設により建ぺい率が上昇した。建物飽和期は現在も進行中である。

3 キャンパスにおける建物配置の比較・分類

3-1 方法

東京都 23 区内にキャンパスを所有している大学（全 66 校 83 キャンパス）を対象とし、各大学のホームページに掲載されている配置図、並びに航空写真で見た配置図を元に、敷地、建物配置を比較、分類した。

3-2 キャンパスの分類

敷地、建物配置の比較により、対象大学のキャンパスを表 2 のように七つの型に分類した。さらに所在地により、世田谷区に代表される「郊外型」、千代田区や文京区に代表される「都心型」、新宿区に代表される「新都心型」に分類し、それぞれの型に見られる特徴、傾向を述べた。

	分類	該当数	郊	都	新
1	象徴建物型	15	9	5	1
2	並列型	26	17	7	2
3	中庭型	18	9	7	2
4	高層建物単独型	6	1	3	2
5	建物点在型	9	2	5	2
6	象徴建物・中庭混在型	4	1	1	2
7	その他	5	2	2	1
	合計	83	41	30	12

表 2 キャンパスの分類

3-2-1 象徴建物型

正門の正面または正門付近に、建物配置の中心となっている象徴的な建物が建てられている配置形式。この形式は、1930 年以降に成立したキャンパスにはほとんど見られない。当校もこの型に分類される。

3-2-2 並列型

配置の中心となる建物が無く、通りや敷地の外周に沿った方向に建物が並列されている配置形式。最も実例の多い型で、特に世田谷区に

集中している。

3-2-3 中庭型

建物によって四角く囲まれた中庭が設けられている配置形式。または、建物が敷地の外周沿いに建てられ、内側が中庭となっている配置形式。並列型の次に多く、所在地に寄らずに見られる。

3-2-4 高層建物単独型

一棟の高層建物のみが大学となっている形式。または、高層建物の中のいくつかのフロアのみが大学となっている形式。数は少ないが、近年、都心や新都心に増えてきた。

3-2-5 建物点在型

大学の建物が、単独、または 2, 3 棟ずつで街のなかに点在している配置形式。千代田区に集中して見られる。

3-2-6 象徴建物・中庭混在型

象徴建物と中庭がひとつのキャンパス内に混在している配置形式。数は少なく、1950 年以降に成立したキャンパスには見られない。

4 まとめ

お茶の水女子大学キャンパスの成立過程は五期に分けられた。建物配置は四つの軸に従っており、大学講堂および生活科学部棟を中心とした象徴建物型のキャンパスであった。また、敷地内には高低差があり、軸領域および配置形式に影響を与えていた。

象徴建物型キャンパスは文京区および郊外に多く見られ、また、1930 年以降に成立したキャンパスにはほとんど見られないことから、お茶の水女子大学キャンパスはこの型の典型ともいえる。

他大学との比較による当校キャンパスの今後の方向性としては、大学講堂および生活科学部棟を保存建築として保ちつつ、四つの軸領域をさらに変容させてオープンスペースを増やし、都心における広場または緑地として活用することが求められている。

【参考文献】(1)「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会, お茶の水女子大学百年史, 私製, 1984(2)東京女子高等師範学校, 東京女子高等師範学校六十年史, 秀英社, 1934(3)東京女子高等師範学校, 東京女子高等師範学校一覧, 私製, 1929 - 1937, 1942